

ざいそう

## 会社一筋四十年を振り返って

齋木成治



弊社は今年2月18日に創業四十周年を迎えました。この間決して順調ではなく、業界全体がそうであったように、弊社も大きな山谷を幾度も越えてきましたが、その都度“神風”が吹き今日まで生き延びてきたという感じがしております。

弊社の創立期は「日本住宅産業リース株式会社」と称し、建設業界に一定の貢献をするべくして、各方面の皆様方よりご支援を頂き、設立された会社でした。当時は重機のレンタル事業は既に定着し始めていましたが、弊社のようにタワークレーンを保守管理・オペレーティング付きでレンタルする事業は画期的な発想で、業界内においては注目されたものでした。私は創業期から縁あって弊社に入社しましたが、今は創業期から生き残っているのは私一人だけとなりました。ある意味決して平穏でなかったということになるのかもしれない。

この四十年間を振り返り、今更ながらレンタル事業の難しさを痛感しています。メーカーではないものの商品説明においては機械の性能ノウハウはメーカーより持っていなければならない。また使用ノウハウにおいてもお客様より持っていなければならない。何より難しいのは、戦略機械であるタワークレーンを、お客様の要求により、必要な時に、必要な機械を提供するということです。戦略的な機械に位置づけられているタワークレーンは価格も高く、製作期間も長く、市場の動向とのマッチングは極めて難しいのです。タワークレーンの日常作業は高所作業であり、常に危険が伴い、安全作業への取組みも手抜きは許されません。

近年、「企業は人なり」とよく言われますが、改めて、個人のスキル・感性が大切と痛感し、ノウハウ・技術の伝承と感性を磨く人間力の向上に取り組んでいます。いろんな文献を読み漁りつつ、諸先輩方のご意見を聞き、モチベーションの維持向上や企業の方向性についての目的統合を図るも、なかなか湧き上がるものがない。何故だろうかと思っている今日です。

私自身、企業の生い立ちからして、当初は部長クラ

スになれるとは思ってもみなかったし、もちろん社長になるとは夢にも思っていませんでした。再三の危機にもこの会社を辞めようとも一度も思わず、この会社に縁があったのでしょう。当初は、必ずしも上司や上層部の評価は良いものではなかったような気がしています。寄せ集めの人材で立ち上がった会社であり、「機を見るに敏」な社員も多く、愛社精神が生まれるほどの軍団としての組織も形成されておらず、多くの人が去り、残る人がいかにも非力な映り方をしたのですが、私自身は、結末をしっかりと見定めるまでは頑張ろうと思っておりました。

田舎育ちの私は、中学生以上になれば一人前の労働力として員数に組み込まれ、あらゆる農作業に取り組んだことは、今となっては実に懐かしく思い出されます。そして社会人になり当時の田舎者は、都会つまり東京に出て将来を見出すしか方法がなかったように思います。私自身の特異な環境なのかもしれませんが。

入社時には会社設立に携わったものの、その後は営業職に転じました。出身は文系であるがゆえ、当初は計画等の技術系の仕事はできるか不安もありましたが、わからないことはしっかり聞き、更に確認してもらいながら、大きなミスもなく今日までくることができました。

私自身に言い聞かせていることではあるが、「言われたことだけをしている仕事に苦労はない」、「自分から積極的に申し出てする仕事にこそ苦労がある」と、苦労は早くしたほうが良いと思うが、昨今の世の中、理解してもらえないでしょう。最近特に感じることは、年齢に関係なく、守備範囲が狭く、カバーリングもなくなってきたように思えてなりません。

競争力のアップが勝ち抜く手段とすれば、常に一歩踏み込んだ行動が不可欠と常に社内に発信しています。古い人間になったのかもしれないが、今更ながら器用に生き方は変えられません。